日本経済新聞　2006年（平成18年）12月17日（日曜日）

バリアフリー旅行

定年退職後は、苦労をかけた妻と旅にでも……。こんなリタイア後の夢を抱いていたのに、脳血管疾患などの大病に見舞われ、旅に出るのを諦めたシニアは少なくない。しかし最近、高齢者や障害者など体が不自由な人に配慮した「バリアフリー旅行」が普及。旅の喜びを再び味わおうと、勇気を出して一歩踏み出す人々も増えてきた。

旅の喜び もう一度

一人で安心、専門ツアー続々

乗鞍岳の山頂付近に立つ大久保章さん

「最初の旅は妻にぴったりくっついていないと不安だったが、今は一人で大丈夫」と話すのは東京都内に住む大久保章さん（66）。

本田技術研究所の技術者だった九年前、突然の脳内出血で左半身麻痺に。しかし、趣味のカメラと旅行が諦められなかった。旅行を楽しみにしていた妻の存在もあり、懸命に歩行訓練に励み、杖を支えに歩けるようになった。

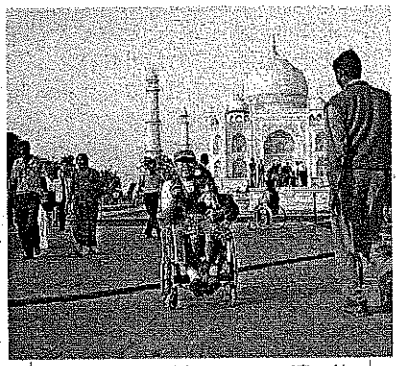
四年前、沖縄を皮切りに旅行を再開。高齢者や障害者に配慮した専門ツアーに参加し、年に三、四回、国内旅行に出かけている。小川の脇の細い木道を渡りたい。草むらに生える植物を写したい――。旅に出るたび新たな願望が生まれ、リハビリにも精が出る。立って記念写真を撮るだけなら、杖なしでも大丈夫なほど回復してきたという。

シニア世代になると、足腰が弱ったり持病を抱える人が増えるうえ、生活習慣による心疾患や脳血管疾患も起こりやすい。病気や後遺症を抱えると「旅行など無理」と躊躇しがちだが、最近ではこんなシニアが参加しやすい「バリアフリー旅行」と呼ばれる専門ツアーが増えている。

料金はやや割高

旅行会社のクラブツーリズム（東京・新宿）は、専門窓口「バリアフリー旅行センター」を設け、年約八十本のツアーを実施している。一般よりトイレ休憩や観光時間を多めに取るほか、添乗員とは別にボランティアスタッフが原則同行。荷物の移動や食事の取り分けを手伝う。介助が必要な場合は、介護の有資格者が有料で付き添う。

料金は通常より一、二割高め。だが、ペルーの遺跡のように階段のある観光地でも現地でアシスタントを雇い、歩けない人を皆で担いで上るなど「バリアーがあっても何とかする、という姿勢で臨んでいる」とイフケアサービス事業部長の長橋正己さん。


インドのタージ・マハルで滝口仲秋さんは地元の女の子とパチリ

東京都内に住む諏訪幸雄さん（77）、秀子さん（71）夫妻は、月に二回の割合で同社の国内旅行に参加する。旭山動物園など遠出の旅から、群馬県へのバスツアーまで行き先は幅広い。

トイレ休憩多め／有料介護も

実は幸雄さんは七十一歳のとき脳内出血で倒れ、車いすで生活している。秀子さんは「下り道で車いすを一人で支えるのは大変。助けてもらえるので助かる」と話す。幸雄さんは旅に出るたび元気を取り戻し、時々つえで歩けるようになった。「倒れたときは医者は一生歩けないだろうと言ってたよ」と笑う。

JTBやエス・ピー・アイ（東京・渋谷）などでも、バリアフリー旅行を扱っている。初心者はこうしたツアーを利用すると安心だ。

では、旅に出るにあたっての留意点は何か。まず必要なのは、旅行会社とのきめ細かい情報交換だ。駿台トラベル&ホテル専門学校ユニバーサルツーリズム学科長の小野鎮さんは「自分の身体状況を細かく伝え、旅行会社がどこまで対応できるかを事前に把握してほしい」と指摘する。

正直に伝えると拒否されるのではとの恐れから、あいまいに伝えた結果、旅先で十分な支援が受けられない可能性があるからだ。逆に「細かく身体状況を聞かれる場合があることも承知しておけば、不快にならずにすむ」と小野さん。

生きる自信にも

旅の準備も入念にしたい。特に海外の場合は、日程も長く日本とは勝手が違う。バリアフリー旅行で約十年のキャリアを持つエス・ピー・アイのマネージャー、伴流高志さんは「いざという時の供えを万全にしておくと安心して旅行ができる」と話す。

例えば薬。伴流さんは必要量の一・五倍以上をすべて手荷物で持つよう勧めている。通常の海外旅行傷害保険は持病の治療は対象外であるため注意したい。旅行鞄も持ち歩きが楽なものを選びたい。例えば、スワニー（香川県）では、杖のようにもたれて歩けるバッグを販売している。

シニアが旅行中に特に注意したいのが転倒だ。つえ先のゴムが消耗していると、大理石の床などで滑りかねないから補強しておきたい。また浴室での転倒は「バスタブの底にバスタオルを敷いておくと防ぎやすい」（伴流さん）。

約十年にのぼる車いすでの旅行記を著書『足がだめでも手があるさ』（日本図書センター）にまとめた元教員の滝口仲秋さん（70）は、「何よりも大事なのは『まず旅に出てみよう』という強い意志」と強調する。滝口さん自身、家に閉じこもり落ち込んだ日々もあったが、おっかなびっくり旅に出始めてから、驚くほど気持ちが前向きになった。

「旅先でバリアーはたくさんある。でも一つひとつ乗り越えれば、生きる自信に確実につながっていく」と滝口さんは断言する。

（榎本祥子）

【主なバリアフリー旅行の窓口】

クラブツーリズム	「バリアフリー旅行センター」（東京・新宿）☎03・5323・6915 国内海外あわせて年間約80ツアーを開催。ボランティアスタッフが同行するほか、有料で付き添いをする「トラベルサポーター」も頼める
エス・ピー・アイ	「あ・える倶楽部」（東京・渋谷）☎03・6415・6480 ツアーのほか、介護福祉士やホームヘルパーの資格を持つ「トラベルヘルパー」が同行し介助をするオーダーメードの介護旅行を多く手掛ける。来年は四国霊場巡礼ツアーも実施予定
JTB	「バリアフリープラザ」（東京・港）☎03・3456・5411 「ソレイユ」ブランドで国内海外あわせて年間約80ツアーを開催。国内の観光地で入浴介助が必要な場合は、有料で現地のホームヘルパーなどを手配できる